

飛驒・美濃見聞録

北安曇農業普及センター地域生活課
課長補佐 矢 島 悦 子

初夏にはちょっと早い6月初旬、松本大学地域総合研究センターのはからいで実現した地域づくり研修旅行に参加した。この企画の通知を見た瞬間すかさず「行こう」と決めた。何故か、それは視察先が「清見」「高山」「郡上八幡」と私の憧れの土地ばかりがてんこ盛りになっていたからである。高山は今までも何度か訪れてはいたが、いつも短時間でじっくり居座ることができなかった。(今回も同様になってしまったが) 郡上八幡は、哀愁漂う盆踊りに惹かれながらもまだ未踏の地であったし、何よりも私は清見村に心を高ぶらせてしまった。

正確に言うと「清見村」と「松葉助役」なのだが、松葉さんを始めて知ったのはもう7年ほど前になる。講演を聞く機会があって、当時は確か産業課長さんだったような記憶がある。元々岐阜県職員の農業改良普及員であったが、時の村長にその力量を見抜かれ村の職員になってしまった人だと事前に聞かされていた。だから、同業者(私は現役の改良普及員)として一体どんな仕事ぶりか首長を動かしたのか、興味津々でお話を聞いた。そして、とにかくすごい一言だった。まず、語り口の迫力、普及員の仕事の範疇をはるかに超えた(国会とか、永田町とか、なにかとてもえらい人達と丁々発止でやったきたらしい)スケール、自分の信念をある種の強引さで引っ張り、成し遂げてしまうあふれる自信とエネルギー、酒の強さも半端ではなかった。そして、何より感じ入ったのは、これまでどれほどの人達を敵に回し戦い続けて来たんだろうということだった。細かい内容は霞んでしまったが、かなり強烈な人物として私の脳裏に刻まれたのである。こんないきさつもあって、その戦場を是非見たいものだと思っていた、それをご本人が案内して下さるとの内容に嬉々として参加した次第である。

「高山」

高山市内の一等地に構えた清見村直営のそば処「清見庵」、シンプルな落ち着いた雰囲気の内店と何となく「村」を感じさせてくれる店員さんに迎えられて、まずは笹寿司で腹ごしらえという段取りだった。詳しくは覚えていないが確かメニューはそばとうどんだけで、看板に偽りなしの経営をしていた。私は根っからのそば好きではないのでうどんを味わった。が、思うにそばの本来信州から出掛けたのだから敵陣の味を賞味、評価しなくてはせっかく行ったかいがなかったと、今更ながら悔やんでいる。肝心の松葉助役はそご尊顔に拝したものの、ゆっくりお話というわけにはいかなかった。しかし、超多忙の中このように駆けつけて下さったのは、何より玉井先生とのご縁の深さがそうさせたのであろうと思い感謝した。さてさて、老若男女それぞれの魂胆を抱きながらの旅がこうして始まったのである。その後の市内散策は町並み観察という課題があったのだが、私は昼食直後にもかかわらず飛驒牛の串焼きをほうばって土産物屋のウィンドウショッピングに没頭していた。

歴史と伝統が街中にしみ込んでいる高山だが、今回はそれとはどうも違った存在があることを知った。それは、世界生活文化センターだ。要するに飛驒の文化を総まとめで見てもらおうという展示館なのだが、その大きさ、贅沢な作りに圧倒され、そして心配になった。平日とはいえ、もっと賑やかさを想像したのだが……。皆1回は来るであろう、何しろあの建物は何だの疑問を晴らすべ

く。だが、次はどうだろう、私には街全体が文化である高山にはこれは屋上屋のような気がしてならなかった。ここに限らず、生活の場から切り離れた文化は「展示」となってしまう借り物ではない。さりとて、その文化はどんどん生活から消え去っている現実もある。ただ、言えるのはこれらが生き残る道は「観光資源」という名目での保存とその利用である。しかし、一昔前であれば、観光客は物珍しさで地方を訪れ、ふーんと感心して帰って行った。だからこのような「展示」でも良かったのだろうが、これからは違うと思う。記憶に残るだけの観光ではなく「心に残る旅」を求める時代が確実にやってきている。だから大がかりな建物はいらない、気持が安らぐ空間、人とのふれあい、その土地の味が欲しいと、世界文化センターの寂しい駐車場を見て考えさせられた。

「清 見」

コンポストセンター、農産加工センター等を見学してふるさと公園パスカル清見に宿泊、だいぶ清見村の様子にふれることが出来た。前述の講演で聞いた同施設は、いわゆる市町村営や第3セクターにありがちな殿様商売的なものではなく、徹底した企業精神と合理性を取り入れたものであると理解していた。今回現場を目の当たりにして詳しい知識ではないので誤解もあると思うが、地域のためにという前に、経営として成り立つ利益を上げる事業でなければならないという信念を強く感じた。私の立場での乏しい経験などではとても描けない構想と展開が各施設を拠点に繰り広げられていた。

例えば、私が日頃接している農産加工事業とはもう別物のレベルというか、異質のものがそこにあった。販売額が畜産物で1億円、ドレッシングで1億円との説明にこれは起業ではなく、まさに企業だと実感した。地場産原料を売りにするささやかな農村起業からは想像もつかない食品加工业の展開は、流通業界のプロを支配人に起用した松葉助役の経営ポリシーを見事に実現しているようだった。ただ、この目玉商品である牛肉の角煮は、豚の角煮に慣れている私の舌にはちょっとした抵抗感を残した。短時間の断片的な認識では語れない内容なのでこの程度の感想に止めたい。

夕刻パスカル清見への路程は山国清見を存分に感じた。翌朝目にした建物は、宿泊施設と橋、道の駅の売店だけで雰囲気は全体にひっそりしている。広大な敷地と川幅をたっぷりとした河原で遊んでいる人々の姿に、長野の道の駅とは違った風情を感じた。実はもっと商業的なイメージを抱いていた私には正直なところ意外でもあった。次の関心事は売店の品揃えで、あれこれ物色してみた。旅先で心底欲しいと思わせる土産物に出会うことは滅多にない。言い換えれば、ここにしか、今しかないといった類の物になるのだろうが、それほど購買欲をくすぐるものには残念ながら出会えなかった。これは全国の道の駅が抱える課題であると思う。それより、裏の河原に良さそうな石がゴロゴロしていたような気がしたのだが、石の細工なんかはどうだろうとつまらないことを考えてしまった。

「明 宝」

現在、全国で活躍する農村女性による起業集団や個人は今や7,000件にも登り、なお増加の勢いであるという。「明宝レディース」の名はその関係の人であれば、必ずや耳にする有名な農村加工集団である。私は普及活動の現場で多くの女性社長さんと出会ってきたが、ここの本川社長さんにも共通するあることに気づいた。それは皆さんの存在が少々ふくよかであることだ。どうでも良いことのようにだが、眠れない位の苦勞を克服するのは、丸みのあるソフト感で包み込むリーダーの魅力とゆったりとした器量の大きさかなと、若々しくチャーミングな本川社長に見惚れてしまった。玉井先生が「昔は怖くて近寄りがたかった」(?確かそんなことを)とつぶやいていたが、益々磨きがかかってきたのだろう。

ケチャップの加工場では生食用トマトの水分を飛ばすために、ひたすら煮込む作業が続けられていた。作業工程は至って簡単で手作業も多いようだ。地元特産のトマトを余すことなく生かし、ケ

チャップに並ぶふきの佃煮も地元住民のからの買い上げでまかなっていると聞いた。これがコミュニティビジネスなのだと思う。レディースにも地元にも金が落ちる、だから加工場は地域全体の加工場になる。「ここにしかない」ケチャップは当日は在庫ゼロとのことで、後日宅配をしてもらった。食味は市販品とは全く別物だった。本川さんの「私達の顧客はほとんどがリピーターです」と語った言葉がうなずける味と食感であった。これは調味料ではなく1つの独立した食品で、トマトそのままの味と姿に私は大いに惹かれた。ちなみに今一番気に入ってる食べ方は、スクランブルエッグにケチャップをトロッとかけバジルを一葉添えるメニューである。

「郡上八幡」

いよいよ研修も佳境、ようやく水都「郡上八幡」に到着した。ここではガイドさんがついて町中を丁寧に案内してくれた。しかし、時々よそ見をするものだから折角の案内を聞き落としてばかり、でも街中を縦横に巡る水の回廊は十分堪能することができた。こんこんと湧き出る流れに悠々と群れ泳ぐ鯉達、淀みない水流は家々の裏木戸のほとりを洗い、度胸試しに飛び降りるという新橋では子供達の歓声が聞こえる。行く先々に郡上の人々と水との物語があった。

昼食は、地元の女性グループが郷土食レストランを開いている旧庁舎記念館で戴いた。おこわをメインにした素朴な料理をお給仕してくれるおばさん達に、ちょっと胸が熱くなる。ここにも頑張っている同志がいるんだなど。今年の郡上おどりは、7月12日から始まり9月6日がおどり納めで、通常は観光客向けにしつらえた踊りの博覧館でその雰囲気に触れる格好になっている。ここにも素晴らしい案内人がいた。ぐいぐいと私達を引き込んで離さない巧みな話術と熱意には、いたく感心し刺激を受けた。私は今、長野県でも有数の観光地を活動現場としている。いかにこの地に多くの人々が通ってきてくれるのか、経営難に喘ぐ観光業者は今まさにその手法を模索している時である。今回郡上に住む「地元の人々」が案内してくれた姿に、ひとつのヒントを貰ったような気がしている。

私はこの研修の後、2年間の農村女性のための仕事おこしセミナーを開設した。これは昨年、松本大学で開催した「コミュニティビジネス講座」への参加を契機としている。管内の35名の農村女性が手を挙げた。最初から「仕事」は考えてはいない。それ以前のところからのスタートで、格好良く言えば「自分探し」といったところである。お陰様で白戸先生や住吉先生のご指導も頂けるようになった。これもこの研修の大きな成果であったと思う。どんなセミナーになっていくか未知数であるが、いつか受講生達と共に飛騨、美濃巡りができればと願っている。

終わりに、この研修の準備、また当日の案内と汗をかきながらお世話をいただいた大学の皆さん本当にありがとうございました。